

～性的少数者の人権～

～性自認～

「日本は簡単に性別を問いすぎる。 記入が必要なときにも記載方法に配慮を。」

小学校低学年の時から自分の性別に違和感を持っていて、周りから押しつけられる女性らしい服装・言葉遣い・態度がとても嫌だったと振り返るOさん。名前を変え、乳腺摘出手術も受けていますが、まだ戸籍は変えられません。今の戸籍上の性別変更の条件が障壁となっています。

○ご出身は北海道だそうですね。

20歳の時に派遣職員として大分県に来ました。10年以上暮らしていましたが、今は正職員となって熊本県に住んでいます。家族は北海道にいます。

○周りの子と違うと思ったのはいつ頃ですか。

小学校低学年の時です。体の性と言うより、社会的性（ジェンダー）での違和感です。男の子とばかり遊んでいました。遊び・言葉遣い・服装・色など、周囲から求められる女の子っぽいことを強要されるのがとても嫌でした。特に高校生になると、セーラー服が嫌で制服の上からジャージを着ていました。また、一人称の使い方に悩みました。女性的な表現は使いたくない一方、「僕」や「俺」など男性的な表現もしっくりこない上に、周りにも違和感があったようなので、結局「自分」に落ち着きました。

○出生時に割り当てられた性とは別の性で生きるためにどのようなことをしましたか。また、どのような障壁があると感じていますか。

26歳の頃、見ただけで女性と判断される名前が嫌だったので、家庭裁判所に行って変更しました。性同一性障害の診断書と、新しい名前の使用実績があれば認められます。現在の名前は、様々な形のセクシュアリティがある中で、共存共生できる社会になるように自分でできることをしていこうという思いを込めて、自分で選びました。

また、同じ年、乳腺摘出手術を受けました。性同一性障害に関する委員会の策定したガイドラインによると、まず第1段階として医療機関での十分なカウンセリング、第2段階としてホルモン注射や胸の切除手術があります。しかし、これでは戸籍上の性別の変更はまだできません。最終的に戸籍の変更が認められるの

は、その他の条件もありますが、内性器の摘出や外性器の形成が必要となります。自分は生まれつき卵巣の機能不全があったため、性腺への手術の必要性を感じていません。トランスジェンダーや全ての性同一性障害の方が手術を必要としているわけではありません。今の日本の戸籍性別変更の条件は、断種の強制であると世界保健機関等からも反対声明が出されています。

○日本の性的少数者に対する理解度についてはどう感じますか。

日本は性別の記載が必要ないと思われることでも安易に、男性か女性かを問いつぎると思います。性別はとても個人的なことと気づいてほしいです。どうしても、統計等の理由により、記載が必要な場合には、「男」「女」があからさまにわからないような記載方法にして欲しいと思います。たとえば、男性を「1」、女性を「2」と表す等です。

また、バラエティでの性的少数者の取り上げ方や特定の政治家の発言などを見ても、日本のセクシュアリティに対する考え方は、かなり遅れていると思います。2020年の東京オリンピックに向け、人権問題が重点課題となっていて、このことでLGBTなどの性的少数者の存在や特性に気づいてもらう良い機会だと考えていますが、一過性の話題としてではなくオリンピックが終わっても継続した啓発活動がなされるよう願っています。

○今、性自認について悩んでいる人たちにどのようなことを伝えたいですか。

大分県にはまだ性的少数者の専門的な相談窓口がないですね。生徒・学生であれば、学校や保健室等相談できる場所はあると思いますが、社会に出るとインターネット以外で実際に相談できる所がほとんどないように感じます。その孤立感から脱するためにも「SOGIE（LGBT）サポートチームココカラ！」等の当事者団体につながってほしいと思います。

SOGIE（LGBT）サポートチーム ココカラ！とは

- ・割り当てられる性別とは別の性で生きたい。
- ・好きになる相手の性別が異性ではない。
- ・恋愛感情というものが分からず悩んでいる。

など、セクシュアリティに関する悩み事や、あらゆるマイノリティーの方が、地域で安心して暮らすことができるよう、ひとり一人が認め合う社会を目指して活動しています。